

令和 7 年度
【短期研究 4】

小児期逆境体験を有する者が家族形成に関する
意思決定に至るプロセスに関する質的検討

(要旨)

近年、日本では少子化が深刻化しており、未婚化や晩婚化がその主要な要因とされている。従来は、その背景として経済的な不安定さや出会いの機会の減少といった要因が主に検討されてきたが、近年では心理学的要因についても検討する必要性が示唆されている。そこで、本研究では、小児期逆境体験 (Adverse Childhood Experiences: ACE) に着目し、ACE を有する者が、結婚観および親志向性の形成を経て家族形成に関する意思決定に至るプロセスを探索的に検討することを目的とした。

兵庫県こころのケアセンターを受診中の ACE を有する 30 ～ 50 代の成人 3 名に対して半構造化面接を実施し、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: TEM) を用いて分析を行った。具体的には、ACE を出発点、家族形成に関する意思決定を等至点として、ACE から多様な家族形成に関する意思決定に至るプロセスを整理した。

その結果、ACE の影響として否定的な自己信念や夫婦・家族に関する否定的な価値観が形成され、主体的で現実的なライフプランニングが困難となるプロセスが示唆された。また、結婚観に関しては、理想的な家庭を築きたいという積極的な志向がみられる一方で、結婚をリスク回避の枠組みとして捉える消極的な結婚観が語られた。さらに親志向性に関しては、子どもを望む志向と同時に、子どもを持つことへの恐れを抱いていることが確認された。一方で、友人家族や祖父母との肯定的な経験は保護要因として作用し、子どもを望む径路や実親を反面教師とした子育てに至る径路も確認された。

以上より、ACE は直接的に家族形成の意思決定を規定するのではなく、主体的なライフプランニング形成の困難さや特有の結婚観および親志向性を媒介して影響を及ぼす可能性が示唆された。そのため、ACE を有する者への支援においては、ACE による影響に配慮したライフプランニング支援の重要性が示唆される。

研究体制：高山桃香，板倉憲政，木村悠人，酒井佐枝子，加藤寛

I. 問題と目的

2024 年度の出生数は 68 万人と統計開始以降最少であり、少子化は我が国が直面する最大の危機である¹⁾。日本は、他の先進諸国と比べて婚外子の割合が極めて低いため、未婚化や晩婚化が少子化の主要な要因とされている^{2) 3)}。未婚化や晩婚化の要因として、経済的な不安定さや出会いの機会の減少、仕事と子育ての両立の困難さなどが考えられてきた⁴⁾。そのため、若者に対する就労支援や待遇改善といった経済基盤の安定や助成金の支給といった経済的施策が講じられてきた。また、地域少子化対策重点推進事業において、出会いの場を提供するためのマッチング支援や SNS を活用した情報提供、結婚支援コンシェルジュ事業が実施されている^{5) 6)}。そして、2024 年度の婚姻件数は 48 万人と前年度より増加しているものの、近年は減少傾向が続いている^{1) 7)}。また、15 歳以上の未婚率は上昇しており⁸⁾、「いずれ結婚するつもり」である未婚者の割合は性別、年齢、生活スタイルの違いを問わず低下している⁹⁾。このことから、少子化対策は行われているものの、依然として未婚化や晩婚化は深刻化していると言える。

結婚が個人の選択によるものとなった今日、結婚は「個人がどのような生き方を望むのか」という極めて心理学的テーマとなっていることが指摘されている³⁾。したがって、経済的要因や出会いの機会の減少のみならず、結婚と関連する心理学的要因についても検討し、それに応じた支援や施策を検討する必要があるだろう。

これまでの研究から、小児期逆境体験（Adverse Childhood Experiences：以下、ACE）が、婚姻状況や結婚観に影響を与えることが示唆される。ACE とは、幼少期に経験するトラウマとなる出来事である¹⁰⁾。ACE の累積は、肥満や循環器疾患、喫煙、不安、抑うつ、希死念慮、10 代での妊娠など、生物心理社会的なリスクを増大させることが明らかにされている¹¹⁾。高山・板倉（2026）¹²⁾ は、ACE と結婚の関連について文献レビューを行い、ACE は、未婚や早期の結婚、離婚、さらには寡婦となるリスクを高めるなど、婚姻状況に多様な影響を与えることを明らかにした。また、ACE は結婚を希望する理由に影響を与え、否定的な結婚観の形成につながる可能性を示唆した。さらに、結婚観は幼少期の養育者との関係や親夫婦の関係性をモデルとして形成されるため、ACE の一つである両親間の葛藤や離婚が若者の結婚に対する期待に負の影響を及ぼすことが報告されている¹³⁾。

このように、ACE は早期の結婚や未婚、離婚といった多様な結果をもたらすことが明らかにされているが、そのプロセスや分岐点は十分に検討されていない。また、ACE がどのようなプロセスを経て結婚観や、その先にある子どもを持ち、親になることを望む態度（親志向性）に影響を

与えるのかは明らかではない。こうした結婚あるいはパートナーシップの形成と、出産あるいは子どもを持つことは合わせて「家族形成」と呼ばれる¹⁴⁾。そこで、本研究では、ACEを有する者にインタビュー調査を実施し、ACEが結婚観や親志向性の形成を経て、家族形成に関する意思決定に至るプロセスを探索的に検討することを目的とする。

本研究では、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下, TEM) を援用する。TEMとは、個々人は必須通過点 (Equifinality Point: 以下, EFP), 分岐点 (Bifurcation Point: 以下, BFP) を経て、多様な径路が収束するポイントである等至点 (Equifinality Point: 以下, EFP) を辿るという考え方を基本とし、人間の経験を時間的変化と文化社会的文脈との関係のなかで捉え、記述するための方法論的枠組みである¹⁵⁾。TEMでは、ある行為や選択をEFPとしていったん焦点化し、時間的経緯を捨象することなく径路の多様性を記述する。その際、何らかの援助的な力として働くものは社会的方向づけ (Social Direction: 以下, SD), 何らかの阻害・抑制的なものとして影響する場合は社会的助勢 (Social Guidance: 以下, SG) と呼ばれる。TEMは、個々人のライフに関するテーマについて、その人が生きてきた時間を重視しながら考える方法論であり¹⁶⁾、ACEを有する者が家族形成に関する意思決定に至るまでのプロセスを明らかにする本研究の目的を明らかにするために適切であると考え選択した。

Ⅱ．方法

Ⅱ－1. 調査協力者

本研究では、兵庫県こころのケアセンターを受診中の、ACEを有する30～50代の成人を対象に調査協力を依頼した。

TEMでは、「1・4・9…の法則」が提唱されている。これは、TEMの研究の対象者数は、1人、4人±1人、9人±2人、という具合で、異なる質を生み出すという考えである¹⁷⁾。具体的には、1人の場合は個人の径路の深みをさぐる、4人±1人の場合は経験の多様性を描くこと、9人±2人の場合は径路の類型を把握することができるといった利点が挙げられている。本研究では、個々の事例における経験の多様性を詳細に描くことを目的とし、3名を調査対象とした (Table 1)。

Table 1. 調査協力者の概要

	性別	年齢	婚姻状況	子どもの有無	主な収入源	ACE の数	ACE の内容
A さん	女性	40 代前半	離婚	有	パート	6 つ	(3) 親が精神疾患を患っていた、(4) 親がアルコールやギャンブルなどの依存症だった、(6) 親にひどく殴られてケガをした、(7) 食事や着替えなど、必要な世話をしてもらえなかった、(8) 親から傷つくことを言われたり侮辱されたりした、(9) 親から愛されていると感じなかった
B さん	女性	30 代前半	未婚	無	生活保護・障害年金	4 つ	(2) 親が離婚もしくは別居した、(7) 食事や着替えなど必要な世話をしてもらえなかった、(9) 親から愛されていると感じなかった、(10) 経済的に苦しかった
C さん	女性	30 代前半	未婚	無	生活保護・障害年金	8 つ	(2) 親が離婚もしくは別居した、(4) 親がアルコールやギャンブルなどの依存症だった、(5) 父親が母親に暴力を振るっていた、(6) 親にひどく殴られてケガをした、(7) 食事や着替えなど、必要な世話をしてもらえなかった、(8) 親から傷つくことを言われたり侮辱されたりした、(9) 親から愛されていると感じなかった、(10) 経済的に苦しかった

II - 2. 調査手順

調査期間は 202X 年 12 月～202X + 1 年 1 月であった。調査は、プライバシーおよび実施者・調査協力者双方の安全が確保された兵庫県こころのケアセンター内の個室を使用して実施した。まず、基本情報質問紙への回答を求め、その後インタビュー調査を実施した。インタビュー調査は、1 回約 60 分の半構造化面接であった。インタビュー調査は、調査協力者の同意を得たうえで、IC レコーダーにより録音し、それを第一著者が逐語録として書き起こしたものをデータとした。

II - 3. 調査内容

II - 3 - 1. 基本情報質問紙

性別、年齢、婚姻状況（未婚・既婚・事実婚・婚約中・離別／死別・答えたくない）、子どもの有無、最終学歴、職業（職種および勤続年数）、経済状況（家族構成および世帯年収）、ACE の有無を尋ねた。ACE は Adverse Childhood Experiences (ACE) for Japanese¹⁸⁾ の狭義の ACE 項目を使用した。本尺度は、日本人の ACE を測定するために作成された尺度であり、(1) 親が亡くなった、(2) 親が離婚もしくは別居した、(3) 親が精神疾患を患っていた、(4) 親がアルコールやギャンブルなどの依存症だった、(5) 父親が母親に暴力を振るっていた、(6) 親にひどく殴られてケガをした、(7) 食事や着替えなど、必要な世話をしてもらえなかった、(8) 親から傷つくことを言われたり侮辱されたりした、(9) 親から愛されていると感じなかった、(10) 経済的に苦しかった、の 10 項目で構成された。

II - 3 - 2. インタビュー項目

主なインタビュー項目は、(1) 結婚に対する思いや考え、(2) 結婚に対する不安や心配、(3) 出産に対する思いや考え、(4) 出産に対する不安や心配、(5) 結婚、出産といったライフイベ

Table 2. TEM の概念と本研究における位置づけ

基本概念	説明	本研究における位置づけ
等至点 (Equifinality Point : EFP)	研究目的に基づき、ある行動や選択を焦点化するポイントのこと	家族形成に関する意思決定
必須通過点 (Oblogatory Passage Point : OPP)	EFP を経験した人のうち「通常ほとんどの人」がある状況に至るうえで必ず通るもの	主体的で現実的なライフラインプランニングを立てることができない
分岐点 (Bifurcation Point : BFP)	文化的・社会的な制約と可能性の下で実現される意思や葛藤・迷いを含む個別多様な歩みを複雑に分かつポイントのこと	家族形成に関する願望
社会的方向づけ (Social Direvtnon : SD)	EFP に向かう個人の行動や選択に制約的・阻害的な影響を及ぼす力	社会資源の利用、経済的困窮、パートナーによる DV
社会的助成 (Social Guidance : SG)	EFP に向かう有り様を促したり助けたりする力	理想となるような他家族の存在、祖父母による養育

ントに関するプランおよびその理由、(6) 結婚、出産に関するプランに影響を与えたと思われる体験や出来事であった。

II - 4. 分析方法

本研究では、TEM のうち、EFP、OPP、BFP、SD、SG という 5 つの概念を用いて¹⁶⁾、経験を分析した (Table 2)。

まず、TEM の分析手順に従い、語られた内容を意味のまとまりごとに切片化して、時系列順に並べた。次に、類似した内容の切片をまとめて、内容を表す見出しを付けた。その後、どの見出しが OPP、BFP、SD、SG に該当するか検討した。データ分析に際しては、臨床心理学の研究者である第一著者、第二著者、第三著者で検討を重ねることで、分析内容の妥当性を高めた。

II - 5. 倫理的配慮

本研究は、ACE を尋ねるため精神的な負担がかかる可能性が想定された。そのため、調査協力者には調査を開始する前に、①調査の目的や内容、②調査により精神的な負担が生じる可能性があること、③調査への同意は任意でありいつでも同意を撤回できること、④調査協力を断るまたは途中で中止する場合に不利益は生じないこと、⑤プライバシーの保護、⑥調査で得た情報の取り扱いなど協力を際しての留意事項を文書および口頭で説明したうえで同意を得た。なお、本研究は、兵庫県こころのケアセンター倫理審査委員会の承認を得ている (承認番号 : 7-1)。

Ⅲ．結果

本研究では、ACEを出発点、家族形成に関する意思決定をEFPとし、ACEから多様な家族形成に関する意思決定に至るプロセスを可視化するTEM図を作成した（Figure 1）。また、OPPで区切ることで、プロセスは2つの時期に区分された。第1期は、ライフプランニングを立てる時期、第2期は家族形成に関する意思決定を行う時期である。以下では、調査協力者の経験のプロセスについて、各時期ごとの結果を記述する。なお、本人の語りは「」，TEM図中のラベルは＜＞で示す。

第1期 ライフプランニングを立てる

出発点に位置づけられる＜ACE＞による影響として、結婚観や親志向性の形成の基盤となる自己および夫婦・家族に対する信念や価値観が形成されていた。具体的には、原家族に対して「自分の育ってきた家庭はあんまりよくない」、「仲が良くない」といった＜否定的な認識＞があることが語られた。また、幼少期から虐待やネグレクトを受けており、「生きること自体がその日暮らしというかギリギリ」で、「明日はもう起きられないかもしれないみたいな日が続いていた」ような生活状況から、＜将来に対する見通し＞を持つことが困難な状況であった。さらに、周囲に夫婦像や家族像のモデルが存在しなかったことから、「よそからの情報で自分が思い描いたもの（家族規範）だったので、一般的な家庭とずれていないか」といった＜一般的な家庭とのズレに対する不安＞が語られた。こうした経験の蓄積により、「私は望んではいけない」、「自分は大切にされない」「奴隷」といった＜否定的な自己信念＞が形成され、自信の無さや自己肯定感の低さを自覚していた。また、「どうしようもない」実親や不仲な親夫婦の関係を見て「結局は他人同士。終わる時はすぐ終わる」「子どもを産んでも結局夫婦は他人」といった＜親夫婦をモデルとした否定的な夫婦像＞や＜くいなくていい親もいるという価値観＞が形成されていた。

このようなACEの影響を受け、＜精神症状＞が発現し、10代から＜精神科への通院＞が開始されていた。また、＜学校生活や就業における不適応＞といった挫折を経験した。これらの経験から、自分は「朝起きて会社に行って帰ってきてという一般的な生活はできていない」「社会的に普通に生きてこられた方とは全く異なる」といった＜自分の人生に対する失敗感＞が語られた。さらに、そのような「現状が改善していく兆しが見えない」といった＜将来に対する統制困難感＞が生じていた。その結果、「現状を改善させるにしても自分でどうしようもできない」「今の状況がいい方向に変わっていったらいいとは思うけど、思ってるだけじゃどうにもできないし、気持ちでどうにかなる問題でもない」といった＜理想と現実のギャップに対する葛藤＞が語られた。また、

現状や将来について考えることは「しんどくなる」ため「先々のことは考えないようにしている」「あんまりこれからどうしたいかとかもあんまり何も思わない」と長期的に将来を考えることを回避していることが語られた。また、「将来的な計画性はなく」、「具体的なことは考えてなかった」ことや、「自分で計画して築くというよりなるようにしかならない」「私はこうなりたいというのがかなり弱い」と感じていることが語られた。(1) 結婚・出産といった「家族形成」、(2) 職業選択等の「社会的な活動選択」について、いつ・どのような選択を行うか、あるいは選択するにあたってどのような課題があるかを、長期的な視点で検討・計画することは「ライフプランニング」と定義される¹⁹⁾。そのため、本研究では、＜主体的で現実的なライフプランニングを立てることができない＞を OPP に設定した。

第2期：家族形成に関する意思決定を行う

このように、ACEを有する者はACEによる様々な影響を受け、主体的で現実的なライフプランニングを立てることが困難な状況にあった。しかしながら、そのような状況の中でも、調査協力者らは独自の結婚観や親志向性を形成し、家族形成に関する意思決定に至っていた。

まず、結婚に関しては、「友達の家はいいなあとかこんな家族いいなあ」と「手本にする」など、周囲の理想的な家族をモデルとしながら、「ほっとするような楽しい家庭」「(自分の家庭とは)真逆の自分が憧れていた家庭」を築きたいという理想が形成されていた。そして、そのような家庭を築くために「真面目な人」と結婚したいという＜自分が望む家庭を持ちたいという積極的な結婚観＞が確認された。一方で、ACEによる直接的な影響や、「人に合いたくない、外に出たくない」「一人が楽」といった＜回避的な対人関係スタイル＞による影響から、＜消極的な結婚観＞も形成されていた。＜消極的な結婚観＞とは、具体的に、「(結婚は)してもなくても。でも、子ども好きだからそれだったら結婚しないといけない」といった＜結婚願望はないが子どもはほしいから結婚する＞という価値観や、結婚によって相手の借金や不倫といった「トラブルに巻き込まれるのが嫌」などといった理由から、「自分を攻撃しない人」と表現されるようなく自分に不利益がない相手と結婚したい＞といった価値観が語られた。また、＜結婚後に幼少期のような生活はしたくない＞という希望や、そのために「何かあった時に私は生活できるのか」と＜最低限度の生活が保障された＞上でないと結婚ができないという思いが語られた。さらに、自身が結婚に対する意思や希望を持っていないことから、「相手の希望にストレスなく寄り添える」ことが語られ、＜相手が希望するなら＞あるいは＜タイミングがあれば＞結婚すると考えていることも語られた。こうした消

極的な結婚観の存在から、＜結婚はどちらでもいい＞あるいは＜結婚願望は持たない＞という家族形成に関する願望が確認された。また、結婚観に加え、＜経済的困窮（SD）＞が結婚に対する不安となり、結婚願望の形成に影響を与えていた。

こうした結婚観や結婚願望を持ちながらも、＜主体的で現実的なライフプランニングを立てることができない＞ことが影響し、＜パートナーとの交際＞後に十分な熟慮を経ないまま「好きじゃない」相手と＜婚約＞し、「あまり考えずに籍をいれる」といった＜出会ってすぐに結婚＞に至る径路が確認された。そして、その後の結婚生活では、「正体を分かっていたいなかった」夫からDVを受けるようになり、最終的に＜離婚＞に至っていた。

一方で、パートナーとの交際に至るものの、交際解消や＜婚約の破棄＞を経て、＜未婚＞に至る径路も確認された。具体的には、＜パートナーとの交際＞や＜婚約＞を経て、同棲や結婚生活について話し合う際に、＜結婚後に幼少期のような生活はしたくない＞あるいは＜最低限の生活が保障された結婚がしたい＞という思いから、将来の生活条件を過度に確認する傾向がみられた。その言動によって相手から「引かれたり、相手の気持ちが覚めていく」ことや、「（自分の家族の話は）言ったらきりががないため柔らかく言って」「伝えきれてないに等しい」など自己開示が十分に行えていないことが確認された。その結果、＜パートナーとのコミュニケーション不全＞が生じ、＜パートナーとの不和＞を経て、交際解消や＜婚約破棄＞に至っていた。

親志向性に関しては、＜子どもが好きだから子どもがほしいという内発的な親志向性＞や、「祖母に見せたい」といった＜他者のために子どもがほしいという外発的な親志向性＞が確認され、＜子どもを望＞み、＜子どもを持つ＞という意思決定に至る径路が存在した。さらに、＜子どもを持つ＞た後は、「あの父親、母親みたいな家庭は作りたくないって思っていたので（子育ては）わりと頑張れた、反面教師で」と＜実親を反面教師とした子育て＞が行われていた。また、子どもとの時間を確保するために職業選択を行うなど、望ましい子育てを実現するための行動も確認され、子育てを「自分はこんなに親と過ごしてなかったの、自分が自分の子どもとこんなに接することができる時間があることがうれしい」と感じていたことが語られた。

一方で、生活保護や障害年金の受給など＜社会資源を利用（SD）＞している者や、＜経済的に困窮（SD）＞している者の中には、「子どもを育てるのはお金がかかるから、安定した収入がない限りは難しい」「今の（就業していない）状況では無理」といった＜安定した収入があれば子どもがほしいという経済的な条件付きの親志向性＞を有する者もいた。さらに、＜自分も親のようになるかもしれないといった予期＞や、「生まれてきて不幸な子どももいるということを知っている」か

らこそ、＜自分みたいな子どもは生まれてはいけない＞と思うといった＜子どもを持つことへの恐れ＞が生じ、＜子どもを望ま＞ず、＜子どもを持たない＞といった意思決定に至る径路も確認された。

また、子どもを望んでいない場合であっても、＜パートナーとの交際＞において＜妊娠の可能性が発覚＞した際には、自分やパートナーの気持ちは「おざなり」に、「健康に、確実に安全に育てられる環境を整えないといけない」という＜気負い＞が生じ、妊娠が確定していない段階から「選択肢を全て想定して」、行政や家族からの支援の確認、弁護士への相談など＜親になることに対する過度な対処行動＞がみられる径路も存在した。

IV. 考察

本研究の目的は、ACE を有する者が、結婚観や親志向性の形成を経て、家族形成に関する意思決定に至るプロセスを探索的に検討することであった。その結果、ACE を有する者は、ACE の影響を受けて形成された否定的な自己信念や、夫婦および家族に関する価値観から、主体的で現実的なライフプランニングが困難となることが明らかとなった。また、結婚観および親志向性に関して、積極的で内発的な志向性ではなく、消極的な結婚観や複雑な親志向性が形成されていることが示された。つまり、ACE が直接的に家族形成に関する意思決定を規定するのではなく、主体的なライフプランニングの形成の困難さや ACE を有する者特有の結婚観や親志向性を媒介することによって、家族形成に関する意思決定に影響を及ぼしている可能性が示唆された。

本研究では、ACE を有する者において＜主体的で現実的なライフプランニングを立てることができない＞という OPP が確認された。これは、原家族に対する否定的な認識、否定的な自己信念、将来に対する見通しの困難さなどが相互に関連しながら形成されていた。先行研究においても、ACE は青年期における将来展望を低下させるリスク要因であることが明らかにされている²⁰⁾。本研究で得られた「先々のことは考えないようにしている」「これからどうしたいかとかもあまり何も思わない」といった語りから、ACE が将来展望を単に低下させるだけではなく、将来について検討・計画すること自体を回避するプロセスを生じさせる可能性が示された。

こうした回避が生じることにより、＜相手が希望するなら＞あるいは＜タイミングがあれば＞結婚するといった他律的な結婚観が形成されることや、＜パートナーとの交際＞後に十分な熟慮を経ないまま＜出会ってすぐに結婚＞に至る径路が生じた可能性が考えられる。そして、その結果、パートナー選択を誤り、パートナーから DV を受けるといったトラウマ体験の再演というリスクが生じる可能性が考えられる。これらの結果は、ACE を有する者の家族形成に関する意思決定が、長

期的な計画・検討に基づくよりむしろ、状況に応じた短期的判断によって行われる可能性を示唆している。

こうした回避が生じる要因として、再トラウマ化の影響が考えられる。再トラウマ化とは、過去のトラウマ体験に類似した刺激がトリガーとなりトラウマ記憶が想起され、回避行動や否定的な感情・認知といったトラウマ反応が引き起こされることである²¹⁾。つまり、ACEを有する者にとって、結婚や出産といった家族形成に関する出来事は過去のACEと関連するため、再トラウマ化を引き起こす可能性がある。その結果、家族形成について長期的な視点で計画・検討すること自体を回避している可能性が考えられる。

以上の結果から、ACEを有する者が主体的なライフプランニングを形成することが困難であるという課題に対する支援の必要性が示唆される。現在、本邦では少子化対策の一環として、若者が主体的なライフプランニングができることを目指した支援が実施されている。具体的には、人生年表や結婚設計図を作成するワークショップの実施や結婚、妊娠・出産に関する実践的な講座の実施が行われている²²⁾。しかしながら、現行のライフプランニング支援では、ACEによる再トラウマ化の影響が十分に考慮されていない。そのため、ACEを有する者に対しては、ACEに配慮したライフプランニング支援プログラムの開発が求められるだろう。

また、本研究では、ACEを有する者は特有の結婚観や親志向性を形成することが明らかとなった。まず、結婚観について、18歳以上55歳未満の独身者を対象とした調査では、結婚の利点として、「精神的な安らぎの場が得られる」「自分の子どもや家族を持てる」といった積極的な理由が半数以上を占めることが報告されている²³⁾。しかし、本研究では、「〇〇ではない人／生活がいい」といった＜自分に不利益がない相手と結婚したい＞あるいは＜結婚後に幼少期のような生活はしたくない＞、＜最低限の生活が保障された結婚がしたい＞といった語りが多くみられた。これらの結果から、ACEを有する者にとって結婚は情緒的な充足を得るためのものというよりも、リスクを回避する枠組みとして認識されている可能性が示唆された。

親志向性についても同様に、前述の調査では子どもを望む理由として「子どもがいると生活が楽しく心が豊かになるから」「結婚して子どもを持つことは自然なことだから」「好きな人の子どもを持ちたいから」といった理由が多く挙げられていた²³⁾。しかし、本研究では、＜自分も親になるかもしれないといった予期＞や＜自分みたいな子どもは生まれてはいけないという思い＞といった＜子どもを持つことへの恐れ＞が多く語られた。つまり、ACEを有する者において、ACEの体験が再演への恐れとして内在化され、家族形成を回避する方向に作用している可能性が考

えられる。

一方で、本研究では ACE を有していたとしても、幼少期においてモデルとなるような理想的な家族との関わりや、適切な養育的関わりをしてくれる大人とのつながりを経験している場合には、積極的かつ内発的に結婚や子どもを望む径路が存在することも明らかとなった。ACE の保護要因として、子ども期の良い体験 (Positive Childhood Experiences: 以下、PCE) が知られている。PCE は、レジリエンスや情動制御を強め²⁴⁾、精神的健康に肯定的な影響を及ぼすことが明らかにされている。PCE には、安全・安心、信頼・愛・親密さ・養育的態度、友人、養育者以外に頼れる大人、環境などが含まれる²⁵⁾。そのため、本研究で語られた友人家族や祖父母との関わりは PCE として機能し、結婚観や親志向性の形成における保護要因となったことが示唆される。

さらに、こうした PCE を有している者の中には、子育てにおいて＜実親を反面教師とした子育て＞を行っていることが語られた。これは、ACE を有する者が必ずしも親の養育行動を再現するわけではなく、新たな養育実践を構築する可能性を示している。先行研究において、ACE を有する養育者は子育て困難感や育児ストレスを抱えやすく、世代間伝達という形で不適切な養育が再現される可能性が指摘されている²⁶⁾。しかしながら、本研究の結果は、ACE を有する者が実親を反面教師として意味づけることで、異なる養育実践を行い、ACE の世代間連鎖を断ち切る可能性があることを示唆している。

最後に、本研究の限界と今後の課題を述べる。本研究は、3 名の事例を対象とした質的研究であり、結果の一般化は限定される。また、本研究の調査協力者はいずれも ACE の累積数が 4 以上であり、カットオフ値を超える者のみで構成されていた。しかし、ACE は累積数によって影響の程度が異なることや²⁷⁾、ACE の内容によって結婚観への影響が異なること²⁸⁾が報告されている。そのため、今後はより調査協力者数を増やし、多様な ACE を有する対象者を含めてプロセスを検討する必要がある。また、量的研究を用いて、ACE が家族形成に関する意思決定に与える影響を実証的に検討していくことが求められる。

謝辞

快くインタビュー調査にご協力いただき、貴重なご経験をお話くださった調査協力者の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用参考文献

1. 厚生労働省．令和 6 年（2024）人口動態統計月報年計（概数）の概況．2025. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai24/index.html>
2. 大風薫．現代日本における未婚化・晩婚化の実態および研究の現状と課題．生活環境研究．2022; 5: 11-20.
3. 永久ひさ子．未婚者における結婚の条件とアイデンティティ発達および個人主義的家族観の関連．文京学院大学人間学部研究紀要．2022; 23: 93-104.
4. こども家庭庁．結婚に関する現状と課題について．2024. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/f27802a2-0546-424d-ac61-ac0641d67d38/cf9b37be/20240719_councils_lifedesign-wg_f27802a2_02.pdf
5. こども家庭庁．少子化社会対策大綱．2023. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/834d4ee3-212d-4f35-aefa-6b795ebc913a/452ed544/20230522_councils_shingikai_kihon_seisaku_JapZTAT7_08.pdf
6. こども家庭庁．令和 6 年度こども家庭庁行政事業レビュー公開プロセス．2024. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/ca6e69f8-26ba-4aed-821b-95831969e310/ba051eeb/20240607_project-review_2024_07.pdf
7. 厚生労働省．令和 5 年（2023）人口動態統計月報年計（概数）の概況．2024. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai23/dl/gaikyouR5.pdf>
8. 総務省統計局．令和 2 年国税調査 人口等基本収集結果．2021. https://www.stat.go.jp/data/kokusei/2020/kekka/pdf/outline_01.pdf
9. 国立社会保障・人口問題研究所．第 16 回出生動向基本調査（独身者調査ならびに夫婦調査）報告書．2023. https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/JNFS16_ReportALL.pdf
10. Center for Disease Control and Prevention. Fast Facts: Preventing Adverse Childhood Experiences. 2022. <https://www.cdc.gov/aces/prevention/index.html>（最終閲覧日：2026 年 3 月 7 日）
11. Hughes K, Bellis MA, Hardcastle KA, Sethi D, Butchart A, Mikton C, Jones L, Dunne MP. The effect of multiple adverse childhood experiences on health: a systematic review and meta-analysis. Lancet Public Health. 2017; 2 (8) : 356-66. <https://doi.org/10.1016/>

S2468-2667 (17) 30118-4

12. 高山桃香・板倉憲政．小児期逆境体験が結婚観に及ぼす影響に関する文献的考察．心的トラウマ研究．2026; 21: 41-50.
13. Shimkowski JR, Punyanunt-Carter N, Colwell MJ, Norman MS. Perceptions of Divorce, Closeness, Marital Attitudes, Romantic Beliefs, and Religiosity Among Emergent Adults From Divorced and Nondivorced Families. *Journal of Divorce & Remarriage*. 2017; 59 (3) : 222-36. <https://doi.org/10.1080/10502556.2017.1403820>
14. 渡辺秀樹．家族形成の多様性．日本労働研究雑誌．2013; 638: 1.
15. 安田裕子・荒川歩・高田沙織・木戸彩恵・サトウタツヤ．未婚の若者女性の中絶体験—現実的制約と関係性の中で変化する，多様な径路に着目して．質的心理学研究．2008; 7: 181-203.
16. サトウタツヤ・安田裕子監修．カタログ TEA（複線経路等至性アプローチ）—図で響きあう．新曜社．2023.
17. 安田裕子・サトウタツヤ編著．TEM でわかる人生の径路：質的研究の新展開．誠信書房．2012.
18. Fujiwara T. Impact of adverse childhood experience on physical and mental health: A life-course epidemiology perspective. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*. 2022;76 (11) :544-551. doi:10.1111/pcn.13464
19. 内閣府男女共同参画局．女性のライフプランニング支援に関する調査報告書．2007. <https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/raifupuran/pdf/raifupuran1903.pdf>
20. Chainey C, Burke K, Haynes M. Does Parenting Moderate the Association Between Adverse Childhood Experiences and Adolescents' Future Orientation?. 2022. *Journal of Child and Family Studies*, 31, 2359 – 2375. <https://doi.org/10.1007/s10826-022-02275-4>
21. 亀岡智美．精神科看護におけるトラウマインフォームドケアの視点．日本精神保健看護学会誌．2023; 32 (2) : 67-73. <https://doi.org/10.20719/japmhn.32S33.02>
22. 日本総研．2023 ライフプランニング事業事例集．2023. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/b1f489bb-4ead-4f24-a749-bda926d7637d/008e5254/20240422_policies_shoushika_koufukin_taisaku-r05-research_01.pdf
23. 国立社会保障・人口問題研究所．現代日本の結婚と出産—第 16 回出生動向基本調査

- (独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書一. 2023. https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/JNFS16_ReportALL.pdf
24. Morris AS, Treat A, Hays-Grudo J, Chesher T, Williamson AC, Mendez J. Integrating research and theory on early relationships to guide intervention and prevention. 2018. Building early social and emotional relationships with infants and toddlers: Integrating research and practice.
25. 菅原伶奈, 大賀真伊, 東菜摘子, 滝沢龍. 子ども期の逆境体験に対する保護的体験についての研究の現状と展望. 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要. 2022; 45: 61-7.
26. 板倉憲政. 小児期逆境体験に関する概観: 親の ACEs が子育てに与える影響に焦点を当てて. 岐阜大学教育学部研究報告人文科学. 2023; 71 (2) : 115-23.
27. Felitti VJ, Anda RF, Nordenberg D, Williamson DF, Spitz AM, Edwards V, Koss MP, Marks JS. Relationship of childhood abuse and household dysfunction to many of the leading causes of death in adult: The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study. American Journal of Preventive Medicine. 1998; 14: 245-58. [https://doi.org/10.1016/s0749-3797\(98\)00017-8](https://doi.org/10.1016/s0749-3797(98)00017-8)
28. Sobański JA, Klasa K, Cyranka K, Müldner-Nieckowski L, Dembińska E, Rutkowski K, Smiatek-Mazgaj B, Mielimaka M. Influence of cumulated sexual trauma on sexual life and relationship of a patient. Psychiatria polska. 2014; 48 (4) : 739-58.